



## 心の栄養「読書」

校長 吉田 伸 吾

高温続きの猛暑の後に、続けて上陸した2つの大きな台風に伴う大荒れの天候も一段落して、最近はやや秋らしい落ち着いた毎日になりました。一方では、冬の足音も少しずつ聞こえてくるような寒い朝もあって、体調を崩しがちな児童や教職員も見受けられます。まずは健康第一。すべてのことがそこを大前提として始まっていきます。それは身体だけでなく気持ちも一緒です。誰もが心身ともに健康な日々を送ることができることを願って、これからも教育活動に邁進してまいります。

さて、今月の話題ですが、本校の10月の生活目標は「たくさんの本を読もう」でした。秋らしい目標ということで、本校の図書室でも児童の読書推進に向けた取組が行われてきました。

一つには、本校図書委員会の児童が教員や学校図書館指導員とともに読書推進のための様々な掲示物を作成しています。その内の一つとして、昨年度の「竹が伸びる掲示物」に替わって、今年度は「ドラゴンボール 孫悟空のかめはめ波」をテーマとした、児童が本を読めば読むほど「かめはめ波」が遠くまで届くという掲示物が図書室前に貼られています。この掲示物は児童が読書をする励みとなっています。



どこまで行くか「かめはめ波」

もう一つは、本校の特色の一つである「西小サポーター」の皆さんの活躍です。西小サポーターの図書ボランティアの皆さんが、本の整頓とともに他の掲示物作成をしてくださっています。併せて、図書室内に季節感たっぷりの飾り付けもしてくださっていて、そうしたご尽力のお陰で読書をするのにふさわしい環境が出来上がっています。とてもありがたいことです。

こうして読書の推奨をしている本校ですが、ふと自分の小学生の頃を思い出してみると…。

小学生の吉田少年（私です）は、学校から帰ってくると宿題をさっと済ませ、家の前の公園へ遊びに行き、陽が落ちるまで帰宅しないという元気者でした。そのような子ですから、家で読書の習慣はほとんどありません。ですが、思い起こせば本に全く触れないということではありませんでした。そんなアクティブな私の愛読書は昆虫や動物の図鑑でした。特に記憶にあるのは、昆虫図鑑のカブトムシのページと、動物図鑑のなぜかクジラのページです。そこだけは毎日のように開くものですから、手垢でそのページだけが茶色くなっていたことを記憶しています。それだけ肌身離さず読んで（いや「見て」）いたということです。それでも私が通っていた小学校でも、現在の西小と同じように読書を推奨していたものですから、物語などを全く読まない吉田少年は、当時の3年担任の先生に（愛情をもって）叱られてしまいました。叱られた直後は奮起して、一気に10冊ほど読んだのですが、その後が続きません。

そして、部活に没頭する中学校時代を経て、高校に進むようになるとなぜか読書に目覚めます。何がキッカケであったのか、記憶が定かではないのですが、時間を惜しんでは文庫本を開いていました。

現在も、休日等に書店に行けば、一通りベストセラーの本を眺め、面白そうと思ったものは手にとってペラペラと流し読みし、気に入れば手に入れるようにしています。もしくは雑誌などの書評を読み、「これは良さそう」と思った本も通販等で購入しています。（＝今は、こうした本たちをすぐ読むわけではなく、まとまった時間ができたときに一気に読むようにしています。）

結論です。本を読むべきです。特に現代のようなICTやIoTといった言葉で表される情報社会においては、紙の上の活字を読むことは「人の想像力を育てる」効果がとても大きいと実感しています。もっと言えば、読書は「生きる上での諸経験に栄養を与えるもの」と考えています。

かのウォルト・ディズニーは本を読むことについてこう話しています。「海賊が盗んだ財宝よりも、本には多くの宝が眠っている。」大好きな読書から夢をつかんだ人の話ですから、重みがありますね。

でも、かつての吉田少年のように、どのタイミングで読書に目覚めるかは人それぞれ。でもその子供に合ったタイミングを外さないように、学校は子供たちに読書の大切さを語りかけていくのです。